

第3章

調査協力校の実践

調査協力校2校の1年間の取組について紹介します。



取組のポイント

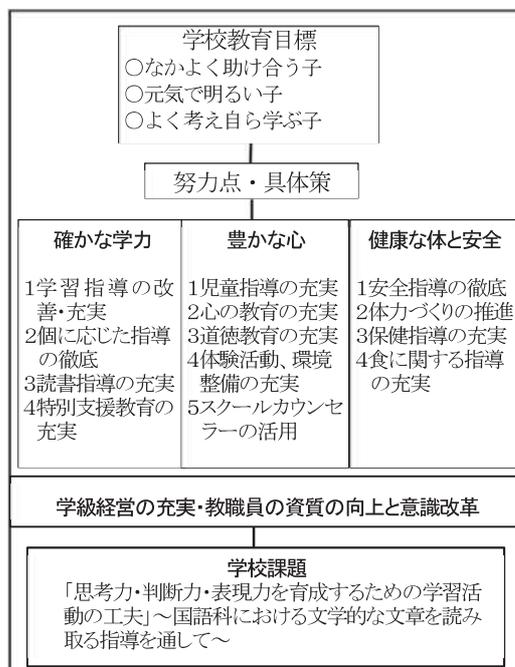
- 国語科を中心として学校課題「思考力・判断力・表現力を育成するための学習活動の工夫」に取り組んでいるが、他教科においても「考えさせる」授業の工夫をしている。この取組は学ぶ意欲の向上にもつながっている。
- 個人で考えさせてから、実態や授業のねらいに応じて、ペア、グループ、全体での学び合いを充実させることで、思考の深まりや互いに高め合える学級づくりを目指している。
- 教師が児童をほめたり、児童同士が学年を越えて認め合ったりする「かがやきカード」、「3Sカード」を全校で活用するなどして、充実感や有能感、自己有用感の育成に努めている。

学業指導に関わるこれまでの取組

学びに向かう集団づくり

学校教育目標「なかよく助け合う子 元気で明るい子 よく考え自ら学ぶ子」の実現に向けて、三つのブロック「確かな学力」「豊かな心」「健康な体と安全」の努力点を掲げている。その基盤に「学級経営の充実」「教職員の資質の向上と意識改革」を据えている。これまで、教職員が高い人権意識をもち、一人一人の児童を大切に、互いのよさを認め合える集団づくりに努めてきた。

その具体策の一つとして「かがやきカード」や「3Sカード」の活用がある。「かがやきカード」は、児童から児童へ、教師から児童へ、メッセージを書いて贈るカードである。このカードを用いることで、親切な行為に感謝し、よさや成長、努力を認め合うことができる。



子どもが意欲的に取り組む授業づくり

〔平成 25 年度 学校経営重点化構想と評価〕の一部抜粋〕

本校では、学力向上のためには、学ぶ意欲をはぐくむことが大切であると考え、平成 23 年度から学ぶ意欲が測定できる「学習に関するアンケート」を、年間 2 回ずつ実施してきた。そして、その結果を学習指導主任が各担任に戻して、実態把握に役立ててきた。

平成 24 年度の研究主題は『「正しく読み取ることができる子ども」の育成～国語科における説明的な文章を読み取る学び方の指導について～』とし、国語科の授業を中心に、基礎・基本の定着、知識・技能の習得に努めてきた。平成 25 年 2 月に実施した国語の学力診断テストでは、全学年が全国平均を上回っていた。教師も手応えを感じていたが、「自分の意見や思ったことを書くこと」「理由付けをすること」「個々の情報を関連付けて読み取ること」などに課題があることが分かった。そこで、基礎・基本の力を身に付けさせながら、自ら思考・判断・表現できる力を育成する必要性を教職員が認識し、平成 25 年度の研究主題を『「思考力・判断力・表現力を育成するための学習活動の工夫」～国語科における文学的な文章を読み取る指導を通して～』として取り組んだ。

研究の実践

1 学ぶ意欲に関する校内研修



(1) これまでの取組から

6月に教員用の「集団や授業づくりに関するアンケート」(p66 参照)を実施した。本アンケートは学業指導のチェック項目を使って、これまでにやってきた指導を振り返ることを目指したものである。総合教育センターで実施した2～5年目研修(5年目)、10年目研修受講者の平均(小学校)より上回った項目は次のとおりであった。

- ・一人一人の実態に応じて、授業の指導計画を工夫している
- ・授業の中で児童生徒が自ら選択できるように、多様な学習方法を用意している
- ・自己評価、他者評価を生かした授業を実践している
- ・実態調査、教育相談などをとおして、学習不適應の把握に努めている
- ・学習不適應の解決に、教職員が協力して取り組んでいる

この結果から、個に応じた指導、評価を生かした指導の充実を図り、自発的な学習につながる学習方法を工夫し、教職員が協働体制で学業指導に当たっていることが分かった。そこで、これらのよさを生かしながら、児童がさらに意欲的に取り組む授業づくりについて研究するために校内研修を実施した。

(2) 研修の流れ

7月30日の校内研修では、学ぶ意欲を測る*「学習に関するアンケート」(p68 参照)の校内全体の結果や学年・学級の結果を配布してデータを共有した。初めに、学ぶ意欲が育つプロセスや構成要素などの説明を聞いた。次に三つのグループに分かれて二つのワークショップを行った。グループは、低・中・高学年のブロックを基本に、全教職員によって構成した。

*本アンケートは、3学年以上の児童が実施した。

① ワークショップ1

学ぶ意欲をはぐくむための働きかけについて、日頃、授業で実践していることを中心に付箋に書き、情報を共有し合った。

② ワークショップ2

右のようなワークシートを活用して、教職員それぞれが学級のアンケートの分析を行った。データを参考にして目標と目標を達成するための手立てを考えた。手立てはワークショップ1の働きかけのアイデアを参考にした。その後、学年ブロックで目標と手立てを共有した。アンケートを実施していない低学年ブロックでは、教職員の観察を基に現状を丁寧に話し合い、目標や目標達成のための手立てを共有した。



〔ワークショップ1の様子〕

◆ワークショップ2「学ぶ意欲をはぐくむための目標設定」
 ・重点目標と目標を実現するための手立てを考える

「学習に関するアンケート」の分析と目標の設定

○学年(学級)の強みと弱み
 —アンケートの結果から読み取れること(※低学年は日頃の観察から)—

〔強み〕	〔弱み〕
------	------

○重点目標
 —アンケートの結果や観察による実態、学校課題などから—

○目標を達成するための手立て
 —ワークショップ1の協議を参考にして—

〔ワークショップ2のワークシート〕

(3) 現状と取組の方向性

ワークショップ2で協議したことのうち、重点目標と主に働きかける構成要素と手立ての例を下表に示した。

学年	重点目標/主に働きかける構成要素	手立ての例
1	体験活動を通してチャレンジしながら学ぶ。/ 挑戦行動	<ul style="list-style-type: none"> ・体験活動を通して経験値を高める。 ・1、2年生合同学習で、1年生は2年生から学ばせる。
2	じっくり考える習慣を身に付けさせる。/ 挑戦行動、協同学習	<ul style="list-style-type: none"> ・1、2年生合同学習で、2年生はリーダーシップを発揮させる。 ・話し合い活動を設定し、互いのよいところを認め合い学び合えるようにする。
3	協同学習を充実させ、互いの考えを聴き合い認め合うことで、有能感を高めていく。/ 協同学習、有能感	<ul style="list-style-type: none"> ・ペア、グループ学習を充実させる。 ・友達の考えと自分の考えとを比べる場を設定する。 ・できたこと、やり遂げたことを称賛する。
4	動機付けを工夫し、自己評価を充実させる。/ 自発学習、有能感	<ul style="list-style-type: none"> ・導入でのICT教材の活用、よい作品の提示により、「できそうだ」というイメージをもたせる。 ・記録や結果が分かるものを示し、達成感を味わわせる。 ・学んだことを誰かに伝える場を設定して、内発的動機を高める。
5	一人一人が目標や自信をもって学習を進められるようにする。/ 挑戦行動、自発学習、有能感	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活に結びつく課題や、さらに挑戦できる課題を与える。 ・具体物を用いる活動やゲームを取り入れる。 ・自主学習を活用して学習意欲を高める。 ・個人差を把握し、個に応じた指導をする。
6	一人一人が目標や自信をもって学習を進められるようにする。/ 自発学習、有能感	<ul style="list-style-type: none"> ・単元の目標を明確にし、個人の目標をもたせる。 ・得意分野で活躍させる。 ・失敗の中の努力を認める。 ・「3Sカード」「かがやきカード」を通して互いに認め合わせる。 ・基礎的な学力を身に付けさせる。

(4) 教師の振り返り

二つのワークショップを終えた教職員の感想には次のようなものがあった。同僚の取組やアンケートの結果から、自身の授業や指導法を振り返っていた。

- ・今日の研修で、普段の教育活動を振り返ることができました。自分のちょっとした働きかけが子どもたちの学びに大きな影響を及ぼしているということが分かりました。
- ・学ぶ意欲のプロセスモデルにより、教師の働きかけが、どの構成要素に働きかける取組なのかを考えることができました。また、多様な取組を共有することができました。
- ・自分としては、子どもに今のレベルで満足してほしくない、もっと引き上げたいと思っっているのですが、その反面、子どものよさを認めることが少なかつたと思います。
- ・重点目標を立てたので、ぜひ、2学期は気持ちを新たに取組んでいきたいと思っいます。

夏季休業中ということで、学期中よりもゆとりをもって研修に取り組むことができたようです。日頃、各自が工夫して行っていることが共有されたこと、子どもの姿とデータを照らし合わせて、重点目標や達成のための手立てを話し合うことができ教職員の意欲がさらに高まったことが、成果です。また、主に授業以外の場面で児童と関わる養護教諭や栄養教諭などの見方や専門分野を生かした働きかけなどを聞くことができたことも、研修の深まりにつながりました。

2 授業実践と授業研究会

D

C

自分の考えを再構成する場の設定による思考力の育成

■ 第4学年 国語「ごんぎつね」の授業

単元の前半では場面ごとの読み取りを行い、単元の後半である本時では、「ごん」と「兵十」の気持ちが通じ合えたか否かについて考え、その理由を自分の言葉で書いて発表し合った。一人で考えたことを、友達と意見交換を行い、再度考えて学びを深める実践である。

(1) 主体的に考えるための学習課題を提示する【知的好奇心】

本時のねらいは「『ごん』と『兵十』の気持ちは通じ合えたのだろうか」であった。児童は物語の様々な場面でこれまでに読み取ったことを基に、「通じ合えた」のか「通じ合えない」のかを考えた。本学級は、立場を明確にして話し合うことには慣れており、興味をもって取り組みやすい学習スタイルである。児童は「通じ合えた」あるいは「通じ合えない」の立場を明確にし、その理由をこれまでの場面読みの学習を生かしてまとめていた。



〔ワークシートを読み合う様子〕

(2) 自分の考えを言える雰囲気をつくる【安心して学べる環境】

みんなで考えていく上では、どんな考えも役に立つということを教師が日頃から伝えており、児童は自分の考えを積極的に発言していた。自分とは反対の意見が出ても、一旦受け止める雰囲気が作られており友達の発言をよく聴いていた。

(3) 自分の考えを再構成する【協同学習、深い思考】

二人の気持ちが通じ合えたかどうかとその理由を発表し合った。どちらの立場かを明確にしているが、理由を聞くと迷いのある児童もいた。話し合いの後、再び個人で考える時間を取った。「通じ合えない」としていた児童の中には、「通じ合えた」と考えを変え、その理由を記述している姿も見られた。

「通じ合えない」
 ・兵十のお母さんが死んだ後、毎日、つぐないをしたけれど、うたれちゃったから。
 ↓
 「通じ合えた」
 ・人は一回いやなことをされるとうらみもちます。でも、最後にあやまった文(「ごん、おまいだったのか。’)があったので通じ合えたと思います。

〔話し合いにより考えに変化が見られた例〕

■ 授業研究会

学年ブロックの三つの班に分かれて、付箋を使って協議が行われ、以下のような意見が出された。

- ・壁面の挿絵を見ながら、前時までの学習を振り返ったことは有効であった。
- ・子どもたちは、いろいろな意見を聴き合って互いに気づきがあったようだ。
- ・子どもたちは理由も述べていたので、その理由を整理しながら深めていくとよかった。
- ・「ごんと兵十は心の中で会話している」など、子どもから出た発言を取り上げて叙述に戻って深めたかった。

話し合いの活動では、理由の異同について気付かせることにより、学びの深まりが期待できます。対立する意見であっても、自分の意見を聞いてもらえると感じて、意見が堂々と言える雰囲気を作ることが大切です。友達の意見を尊重することは、互いに高め合える学級づくりにもつながります。

■ 第2学年 国語「スイミー」の授業

本実践では、指導案検討会で協議した結果、これまで行ってきたような場面を追って読み取る単元計画ではなく、最初に大きなテーマを与えて、テーマに向かって読む計画で指導することにした。本時の学習課題は「スイミーはどんな魚か、家の人にしょうかい文を書こう」である。この課題は単元の初めにも伝えておいた。テーマを与え目的に合った読み取りを行うことにより、児童が思考し主体的に読むことをねらった授業である。

(1) 教師の受容的な姿勢で、自ら学ぼうとする意欲をもたせる【安心して学べる環境】

導入部分で、前時までの読み取りを生かして「スイミーって、〇〇〇」を決める際に、ほとんどの児童が一つに決めることができ、紹介文に何を書くかの見通しが立てられた。

しかし、「どうしても一つに決められない。」と繰り返す児童に教師は「二つにしてもいいよ。」と許容したことで、この児童は最後まで主体的に学ぶことができた。

また、個人で紹介文を書く活動に入ってすぐ、困っているAさんのそばへ行き、問答しうなずきながら「今、話したことを書けば、いい紹介文が書けそうだよ。」と励ますと、児童は一気に書き始めた。「できそうだ」という気持ちももてたようだった。



【自分の考えに名票を貼る子どもたち】

(2) 友達の考えを参考にして、自分の考えを広げる【協同学習、深い思考】

同じ「スイミーは〇〇〇」を選んだ児童同士で集まり、紹介文を読み合った。紹介が終わったグループから自然に手直しが始まった。友達の文を参考にして直す児童、発表したことで新たなアイデアが浮かんで書く児童などの姿が見られた。グループで聴き合うことで自分の考えを広げたり整理したりすることができた。書いて伝え合う言語活動を通して、読む力の深まりにもつながっていた。

(3) 振り返りで、参考になった友達の意見を紹介する【有能感】

教師が何度か支援していたAさんが、Bさんとの学び合いをきっかけに、紹介文を仕上げることができた。振り返りの場面で、Aさんがこのことを発言した。教師が両者を称賛すると、二人の笑顔が見られた。二人とも成功体験をすることができ、有能感の高まりにつながったと考えられる。

【児童の振り返りカードの記述】

Bさんが「あきらめないスイミー」っておしえてくれました。やさしくおしえてくれてうれしい。	きれいに書けるようにがんばりました。Aさんにおしえてあげたら「ありがとう」と言ってくれてうれしい。家の人にもおしえたい。
--	--



Aさん



Bさん

■ 授業研究会

三つの班に分かれて活発に話し合いが行われ、以下のようなことが話題の中心となった。

- ・単元を通してテーマに沿った読みに取り組ませたことで、子どもが思考する姿が見られたので、挑戦させてよかった。
- ・友達の話をよく聴き、学び合っていることがすばらしい。
- ・家族に向けて、話し言葉で書かせると、もっと書きやすかったのではないかな。

本事例のように、低学年であってもその学年に応じたペア、グループ学習ができるように指導することが大切です。日々の授業で同じところ、似ているところ、違うところなどに気付かせる指導をしておく、友達同士で交流した際にも、同様の観点で相手の意見を聞くことができるようになります。

また、協同学習を通して、聴き合うことのよさを実感させることにより、互いに高め合える学級づくりにもつながると考えられます。

課題解決学習の充実による自ら学ぶ力の育成

■ 第6学年 社会「戦争は人々の暮らしをどう変えたの」の授業

第6学年は、社会や理科を中心に右表に示したような流れで課題解決学習を行っている。個人による学習を多く設定し、グループや全体で発表し合い、最後に個人に戻している。この単元の流れを繰り返すうちに、「調べる」「まとめる」部分を家庭でも行い、家族とも学習内容について話し合う児童が増えてきた。

単元の流れの例(総時間8)

- ①学習のねらいの提示、学習問題づくり(1)
- ②一人で調べる(3)
- ③調べたことを簡潔にまとめる(1)
- ④自分の考えを文章でまとめる(1)
- ⑤全体で事実関係を確認し話し合い、自分の考えを更新する(2)

(1) 調べる段階では情報の質や必要性を問わない【情報収集】

1時間目に作った複数の学習問題について、分担して調べた。教師は、「調べる」段階では課題解決に関係がありそうだと思う情報を数多く集め、内容の吟味はしなくてもよいことを児童に伝えていた。このことで、調べることにに対する抵抗感が薄れ、児童は主体的に情報収集に取り組むことができるようになった。

(2) まとめる段階では情報を選択させて、関連を考えさせる【情報収集、独立達成】

自分の集めた情報の中から、課題解決のために必要な情報を精選させることが大切である。児童は必要な情報を選び、関連を考えて図示するなどして情報を整理して簡潔にまとめることができた。



〔事実をまとめたノート例〕

(3) 各自が考えをもって一斉学習に臨み、自分の考えを深める【深い思考】

調べたことを基にして、自分の考えを文章にまとめる時間を確保している。教師は、「自分で考えて書いたことには間違いはない。」ということ伝えていた。資料を基にまとめた部分について全体で伝え合い、必要に応じて修正し共有する。これらの一斉での学習を踏まえた自分の考えを朱で加筆する。このような活動を通して、新たな視点が加わり考えが深まる児童の姿も見られた。

〔授業で分かったこと、感想〕より

- ・日本が強い国をつくりたいという気持ちは分かるけど、きちんと相手のことを考えられるといいと思う。自分と相手を守ってあげられるのが本当の強い国だと思いました。
- ・国と国が仲間になったり敵になったりして、互いが信じられるのかと思いました。今では、戦争をした国とも輸出入もできていてすごいと思います。



課題解決学習に取り組むことにより、資料を基に事実をまとめたり、自分の考えを書いたりするなど、一人で取り組んだ成果を実感できるため、**充実感**や**有能感**の高まりが期待できます。資料を基にまとめる活動としては、ポスターや新聞作りなどが考えられます。教師は、学習の過程で児童が興味をもち、主体的に取り組むための働きかけを工夫する必要があります。

発想の尊重を通じた自発性の育成

■ 第5学年 算数「単位量あたりの大きさ」

算数では学習への関心を高めるために、実生活に結びついた類題を出すように工夫している。「単位量あたりの大きさ」では、児童の歩幅を使って長い距離を求めさせた。

(1) 児童の発想を尊重し、思考させる【自発学習】

児童の歩幅で5歩の平均の長さを測り、校舎の長さを計算するという授業である。教師が初めに「なるべく正確に測定するために、普通の歩き方で歩いた歩幅を測定してください」と説明した。しかし、「自分の最大の歩幅で測った方が正確であろう」と考えた児童が、大股で測り始めた。このような場合、大人の経験から判断して、長い距離を測定すると、最大限の大股を保持することは難しいので、普通の歩き方で測るように指示することが多い。教師は児童の考えを尊重して見守った。すると、大股で測定していた児童はだんだん歩幅が狭まってしまい正確に測定できなかった。児童は実際に取り組むことで、長い距離を測るには、普通の歩き方による測定の方が正確であることを理解した。

関心・意欲・態度をねらいとした授業では、効率的な学びをねらうのではなく、児童の発想を尊重して、進んで取り組もうとする態度を育むことも大切です。

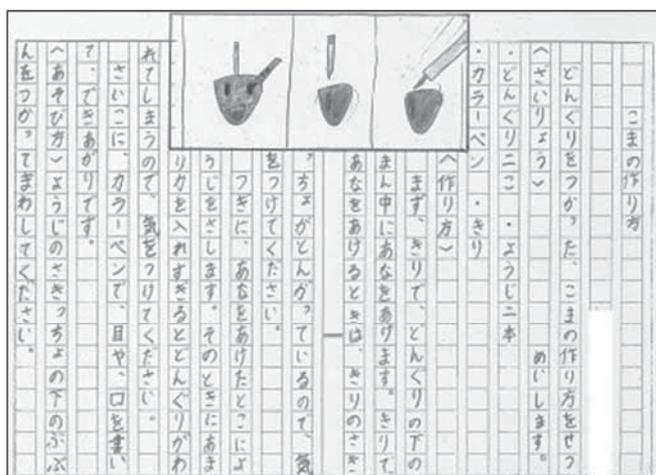
教科横断的な活動を通じた思考力の育成

■ 第2学年 国語「分かりやすくせつめいしよう～おもちゃの作り方～」と図画工作「ちきゅうからのおくりもので」の授業

本学級の担任は自分で考える力を身に付けさせたいと願い、日常的に児童に考えさせるための言葉かけをするようにしている。本実践では、国語で学んだことを生かして自分で作った図工作品の説明書を作り、友達と読み合う活動を設定した。

(1) 活動のおもしろさで、苦手意識を克服してやり遂げさせる【独立達成】

自分が作った作品を友達に分かりやすく説明するという目的意識をもたせることで、書くことに対して苦手意識をもっている児童でも、楽しみながら活動することができていた。実際に自分で作りながらメモをとることによって、順序立てて作り方の説明ができ、作り方のこつや留意点も加えて書くことできた。



【児童が書いた説明書】

(2) 完成した説明書を読み合うことで、学ぶ楽しさを味わわせる【おもしろさ・楽しさ、充実感】

完成した説明書をお互いに読み合った。国語で学んだ「上手な説明のこつ」が使われていることによって、作り方が分かりやすくなることに気付くことができた。また、友達が書いた作り方のこつや工夫の仕方などの表現から、互いに学び合うことができた。

実際に作り方を友達に説明する活動が、創作や思考への意欲を高めると考えられます。また、少し時間をかけたまとまりのある学習を設定することによって、やり遂げた充実感を得ることが期待できます。

カードを活用した振り返りや、よさの称賛による充実感・有能感の獲得

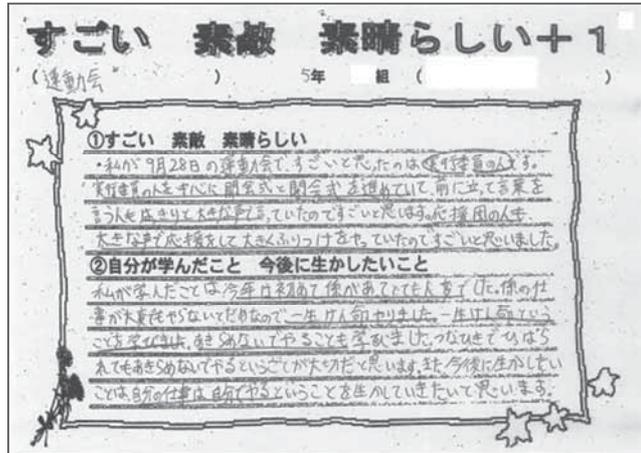
■ 全校生 日常的な活動

本校では、「3Sカード『すごい 素敵 素晴らしい+1』」を用いて行事の振り返りを行い、「かがやきカード」を用いて互いのよさを認め合っている。

(1) 行事における活躍を振り返る【 充実感、有能感 】

行事を終えると、「3Sカード」に自他の頑張りや感動したことなどを書く。

「すごい 素敵 素晴らしい+1」の「+1」については、「自分が学んだこと 今後に生かしたいこと」としてなりたい自分の姿や今後の抱負などを書いている。カードに書いたことは、各学年の代表児童が校内放送で朗読し、児童の関心を高めるようにしている。運動会の振り返りでは、6年生の活躍へのあこがれの気持ちや6年生への感謝の言葉を、多くの他学年児童が書いていた。このように運動会など行事によっては学年を越えた認め合いも行われている。



【5年生が運動会での6年生のすばらしさを書いた3Sカード】

(2) 「かがやきカード」で日常的に認め合う【 有能感 】

「かがやきカード」は、頑張っていたこと親切にしてもらったことなどについて、メッセージを書いて渡すカードである。このカードは2色あり、ピンク色は児童から児童へ、黄色は教職員から児童へのカードとしている。

【児童から児童へ】

日常生活に加えて、授業における友達のよさや励ましを伝える相互評価として使用することもある。

【教職員から児童へ】

学級担任に限らず、授業、清掃、委員会、クラブ活動、行事、日常生活などを通して、よさを認めている。

【2種類のかがやきカード】

このような取組は、集団への貢献意欲を高め、貢献することによって**充実感、有能感**や自己有用感を高めることにつながると考えられます。また、自他のよさを認識することができ、**互いに高め合える学級づくり**にも結びつきます。

教師の振り返りによる授業改善

本校の教師は、学ぶ意欲の向上をめざした授業づくりを行い、児童の様子や成果と課題をレポートにまとめている。

レポートの項目は、右に示したとおりである。

児童の学びの様子から成果と課題を整理し、課題の改善に生かしている。

〔レポートの項目〕

- ・実施日/教科/単元名
- ・働きかけた要素
- ・授業における働きかけの工夫
- ・児童の様子
- ・成果と課題及び感想

このように授業を振り返ることは、「PDCA」サイクルの「Do」の最中や直後に自身が「Check」をして次の「Do」に生かすことになり、授業力のさらなる向上と児童の意欲の高まりが期待できます。

3 実践のまとめ

C

A

11月に2回目のアンケートを実施して、6月の結果と比較した。

「学習に関するアンケート」の結果から

学ぶ意欲を測定する「学習に関するアンケート」を実施し、重点目標を立てて取り組んだ結果、学校全体としては、全ての構成要素の数値が上昇した。

「学習に関するアンケート」の結果〔校内全体〕（第1回:6月、第2回:11月実施）

	安心して学べる環境	知的好奇心	有能さへの欲求	向社会的欲求	おもしろさと楽しさ	有能感	充実感
第1回	3.10	3.15	3.58	3.65	3.25	2.48	3.45
第2回	3.15	3.23	3.63	3.67	3.35	2.57	3.54

	情報収集	自発学習	挑戦行動	深い思考	独立達成	協同学習
第1回	3.12	3.00	2.97	3.17	3.09	3.20
第2回	3.17	3.04	3.07	3.25	3.15	3.33

学年の結果については、7月の研修で決めた学年の重点目標と関わりのある構成要素の数値が上昇した。教師が構成要素を意識して授業づくりや指導を行うことで伸びが期待できることが分かった。

「ふだん思っていることに関するアンケート」の結果から

「学習に関するアンケート」と同時期に、自己有用感を測定する「ふだん思っていることに関するアンケート」（p.69 参照）を実施した。その結果、クラスでの自己有用感の全ての項目で数値が上昇した。

クラスでの自己有用感の結果〔校内全体〕（第1回:6月、第2回:11月実施）

	自己有用感	関係性	存在感	貢献	承認
第1回	3.66	4.22	3.54	3.66	3.78
第2回	3.83	4.44	3.78	3.83	3.88

教師の手応え

- ・先輩の先生に「日常生活が落ち着いているから学習の効果が上がるのか、授業がいいから日常生活が落ち着いているのですか」と質問したことがあります。学業指導の取組を通して、どちらも大切であるということが分かりました。
- ・第1回のアンケート結果を受けて、2学期はさまざまな場面で、グループ活動や学び合いを取り入れました。その結果、第2回目の協同学習の結果は、ポイントが大きく上昇しました。子ども同士の学び合う姿は生き生きとしていて、学習意欲が高まるとともに、学級の和も広げることができました。
- ・個人のデータを見て、さまざまな要因を考えるようになりました。それらを意識して教材研究をし、授業の工夫をしました。その結果、子どもたちは、学習に集中して取り組めることが多くなりました。

実践から学べること

- 学業指導の視点を意識して、子どもが意欲的に取り組む授業づくりを行うことで、学校課題の中心である思考力・判断力・表現力を高めることにつながっていると考えられます。
- 本校のように「学習に関するアンケート」を継続して実施すると、学ぶ意欲の学年の傾向や変容を把握することができます。
- 時間にゆとりがあり、児童の実態が分かってきた夏季休業中に校内研修を設定し、日頃の取組を紹介し合い、目標を共有することは、その後の実践の方向付けとなります。
- 協同学習の充実は、学習の広がりや深まりや、意欲の高まりにつながるとともに、学びに向かう集団づくりにもつながると考えられます。



那珂川町立小川中学校

生徒数	175	
学級数	普6	特支1
教職員数	18	[H25.5.1 現在]

取組のポイント

- 学ぶ意欲のプロセスを全職員が共通理解し、学年ごとに、どの構成要素にどのように働きかけるかを検討し実践した。
- ファイトタイム（確認テスト）で基礎的・基本的な知識・技能の習得を図ることで、「さらに調べたい」「もっと知りたい」などの学ぶ意欲を高めようとした。
- 授業中に適切な課題を与え思考力・判断力・表現力を育てることで、有能感を実感させた。
- 全職員で一人一人の生徒の実態を把握し共有することで、学年の枠を越えて個に応じた指導を実践した。

学業指導に関わるこれまでの取組

学びに向かう集団づくり

本校では平成10年度より「5かけの教育」を推進し、「目をかけ、声をかけ、心をかけ、願いをかけ、時間をかける」を実践することで、生徒一人一人の実態を把握し、個に応じて適切な指導を行い学ぶ意欲を高め、自己実現への援助を行ってきた。例えば、授業中教師は、生徒の実態に即して個に応じた声かけを行っている。また、生徒の進路希望等の情報は、当該学年や学級に関係する職員だけでなく全職員で共有することで、その都度適切な指導を行っている。

子どもが意欲的に取り組む授業づくり

授業中に生徒が意欲的に学習に取り組み課題を解決するためには、基礎的・基本的な知識・技能の習得が不可欠であるとの考えから、本校では、「とちぎの子どもの基礎・基本」を自校化した「小川中の基礎・基本」を作成し、生徒及び保護者に配布しその習得に努めている。習得を確実なものにするため、週2回ファイトタイム（確認テスト）を行うとともに、各担任は昼休みや放課後等に補充対策を行っている。

教員向け学業指導への取組アンケートの結果から

学業指導リーフレット（平成21年1月 栃木県教育委員会）を基に作成した「集団や授業づくりに関するアンケート」（p66 参照）を、本校教員に実施した。その結果、総合教育センターで実施した教職2～5年目研修（5年目）及び10年目研修受講者の平均（中学校）より本校教員が上回った質問項目の主なものは次のとおりであった。

- ・授業の中で一人一人が活躍できる場を意図的に設けている
- ・授業中のことについて、子どものよいところを認めたり、ほめたり、励ましたりしている
- ・一人一人の実態に応じて、授業の指導計画を工夫している
- ・授業の中で児童生徒が自ら選択できるように、多様な学習方法を用意している

このことから、授業中に生徒が活躍できる場を設けることで、称賛する場面を増やしたり、個に応じた指導を工夫したりしながら、生徒に自信をもたせ、学ぶ意欲を向上させる指導が行われてきたことが分かる。

1 学ぶ意欲に関する校内研修

R

P

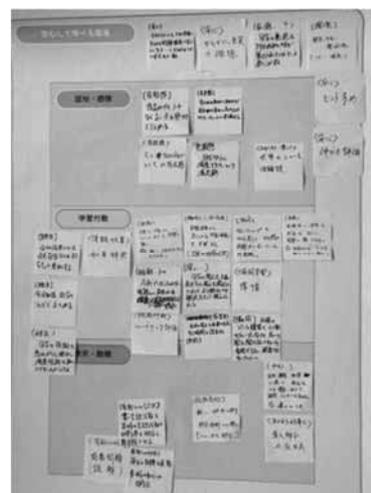
7月に行われた校内研修において、学ぶ意欲が育っていくプロセスや構成要素を理解した上で、二つのワークショップを行った。

(1) ワークショップ1「学ぶ意欲をはぐくむ授業づくり」

学年ごとに、学ぶ意欲をはぐくむために実践していることや効果的だと思われる手立てのアイデアを付箋に書き、模造紙に貼りながら話し合い、情報を共有した。



【協議の様子】



【協議に使用した模造紙】

(2) ワークショップ2「学ぶ意欲をはぐくむための目標設定」

学習に関するアンケートの結果をもとに各学年の結果を分析し、目標を達成するための手立てについて協議した。各学年で確認、検討した手立ては次のとおりであった。

	第1学年	第2学年	第3学年
さらに伸ばしたい要素	有能さへの欲求 向社会的欲求		
伸ばしたい要素	有能感	知的好奇心 挑戦行動	知的好奇心 深い思考
伸ばしたい要素への働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が生徒に教える (ミニティーチャー) 習熟度別ワークシートの活用 課題の明示と振り返りの時間の確保 体験活動の機会の確保 個の状況把握と称賛 基礎・基本を確実に習得させた上での活用場面設定 	<ul style="list-style-type: none"> 基礎・基本の確実な習得 疑問を感じさせる意外性のある仕掛けづくり 生徒自身による課題解決法の検討 	<ul style="list-style-type: none"> 驚きのある発見を導き出す導入の工夫 時間をかけてじっくりと取り組む課題の提示 学び合う場面の設定 具体物や映像、画像の提示 根拠を明らかにさせる指導 身近な事例の教材化 導入部分のQ&Aで、驚きのある発見を導き出す

(3) 教師の振り返り

「本日の研修の振り返り」の記述から

- ・学校や学年のデータが示されたことにより、課題が明らかになり、学年にあった目標や手立てを考えることができました。
- ・学ぶ意欲を高めるためには、いろいろな段階で働きかけることが大切だと改めて思いました。また、他の教科の先生方との情報交換で、自分の授業に取り入れたいものなども見つかりました。
- ・日常的には個人として感覚的に判断していることを、学年ごとに話し合うことで客観的に捉えることができ、今後の課題も見つかりました。
- ・生徒の実態を学ぶ意欲の構成要素という観点から把握し、重点化して指導にあたらなければならない構成要素と手立てを確認することができました。どうすれば、学力向上を目指して学ぶ意欲を高めることができるのかということがよく理解でき有意義でした。

2 授業実践と授業研究会

D

C

挑戦への意欲を高める教師の投げかけ

(1) 授業の概要

- ・第2学年理科「刺激はどこへ伝わるのか」
- ・学習課題「感覚器官で受け取った刺激は、どこへ行き、どのように伝えられるか」
- ・ヒメダカを使用した実験・観察を行う。

実験1

ヒメダカを円形の水槽に入れ、水槽の外側で縦縞模様の紙を回し、ヒメダカの泳ぐ様子がどうなるかを観察し結果を考察する。

実験2

縦縞模様の紙の動き以外の刺激を各班で考え、その刺激がヒメダカの行動にどう影響するかを考察する。



〔ヒメダカを観察する生徒〕

(2) 学ぶ意欲を高める手立て

① 本時の流れを明示して、見通しをもたせる【有能さへの欲求】

感覚器官と刺激の組合せの復習を行った後、課題が提示され、課題を解決するための実験方法や考察の仕方の説明が行われた。1時間を見通すことができるワークシートが配布され、本時の流れを全生徒が理解し見通しをもった上で授業が行われた。

② 友達の意見を参考にして自分の考えをまとめさせる【協同学習】

実験結果を考察する場面では、まず個人の考えをもった上で班の中での学び合いが行われた。自分の考えと友達の考えとを比較したり関連付けたりすることができた。

③ 授業で分かったことを個人でまとめさせる【独立達成】

班別の話合いや班の代表者による発表の後に、学習課題に対する自分の考えを個人でまとめる時間をとった。学び合いの中で得た情報を参考にして、自分の意見を再構築する生徒が見られた。

④ 課題を解決するために必要な実験方法を生徒に考えさせる【挑戦行動】

実験1以外に課題を解決するための実験を生徒に考えさせることで、挑戦しようとする意欲を育てようとした。生徒は、縦縞模様の動き以外の刺激として、光、えさ、音などを考え実験を行い、ヒメダカの動きを観察した。

(3) 授業研究会

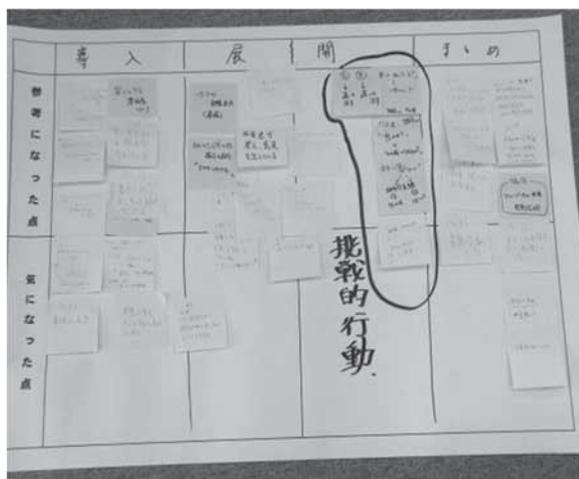
- ・ワークショップ型授業研究会を行い、学ぶ意欲を高める手立ての効果について、付箋を模造紙に貼りながら話し合った。
- ・本時の後半で、学習課題を解決するために自分たちの考えた方法で実験を行わせたことの有効性について話し合い、次のような意見が出された。

- ・普段おとなしく目立たない生徒も、実験2を考える活動では自分の意見を発言する様子が見られた。
- ・縦縞模様以外の刺激を数多く考え実験を行う姿から、意欲の高まりを感じることができた。

※今回の授業研究会は少人数で行い、参加した教師が次回のワークショップ型授業研究会において各グループの中心となるようにした。ワークショップ型授業研究会の導入段階で、このような形態を取り入れることは、次回以降のワークショップを円滑に進める上で有効な手法と考えられる。



【協議の様子】



【協議で使われた模造紙】

教師が示した方法で実験に取り組ませた後、それ以外の新たな方法を考えさせたり、その方法の目的や視点を称賛したりすることで、新たな課題にも挑戦しようとする意欲が高まります。つまり、新たな方法を自分で考えさせる場を設定したり、その方法を称賛したりすることが、**挑戦行動**への有効な手立てとなるわけです。

また、話し合いの場を設定し学び合わせることにより、友達の意見を取り入れようとしたり、尊重したりする態度が育ち、**互いに高め合おうとする集団**の形成を期待することができます。つまり、授業中の**協同学習**が**学びに向かう集団づくり**に資すると考えられます。

失敗を恐れず難しい課題に挑戦させる班別活動

(1) 授業の概要

- ・第2学年保健体育「ソフトボール」
- ・学習課題「個人技能を高めるため工夫した練習をしよう」
- ・班で高めたい技能を共有し、自分たちに必要な練習内容を考え実践する。
- ・他の班からのアドバイスで練習方法を再検討し、より効果的な練習内容に高めていく。
- ・教師は巡回指導をし、各班の練習に適切な支援をしていく。



〔素早く集合し教師の指示を聞く生徒〕

(2) 学ぶ意欲を高める手立て

① 個人技能をさらに高めようとする意欲を育てる【挑戦行動】

高めたい技能を共有した班を編制し、各自の技能をさらに高めるためにどのような練習が必要かを考えさせ、実践させた。

各班とも練習の目的をよく理解し、少しレベルの高い内容を考え意欲的に練習に取り組んだ。



〔話し合いで練習内容を決める生徒〕

② 友達の意見を参考にして考えを深める【深い思考】

班で考えた練習内容やそのような練習を考えた理由をクラス全体に紹介させ、他の班からのアドバイスを受けて、より質の高い練習内容を考えさせた。

③ 「失敗しても大丈夫」という雰囲気をつくる【安心して学べる環境】

集合、整列などの生徒の動きは機敏で、授業がテンポよく展開された。授業の終盤で行われたゲーム形式の練習では、男子と女子、技能レベルの違う様々な生徒同士が、協力し合い励まし合うなど、明るい雰囲気の中で伸び伸びと活動する姿が見られた。



〔協議の様子〕

(3) 授業研究会

- ・目標を共有した班の中で、教え合い指摘し合いながら練習を進めさせた指導の効果について話し合った。
- ・練習中失敗をした生徒を気遣う声かけが自然に出る雰囲気が、失敗を恐れず少し高いレベルの練習に挑戦しようとする態度につながることを確認した。

自分の技能を高めるため、少し高い目標に向けて挑戦しようとする意欲をはぐくむためには、個に応じた練習方法を、生徒自身が検討することが大切です。今回の班には、高めたい技能は同じでも多様なレベルの生徒が所属していたので、高い技能をもった生徒を中心に個に応じた練習方法を考え、教え合う姿が見られました。

また、協力し合い励まし合うクラスの雰囲気をつくるのが、互いに高め合おうとする心を育て、学びに向かう集団づくりにつながると思えます。

(1) 授業の概要

- ・第1学年理科「発生した気体は何だろう」
- ・学習課題「発生した気体Xは何だろう」
- ・発生させた未知の気体Xを捕集し、いくつかの実験を通してその気体は何であるかを考察する。
- ・気体を捕集したり気体の種類を特定したりするための方法や各気体の性質に関する知識は既に習得されており、それを活用して気体を特定する。



【実験に励む生徒】

(2) 学ぶ意欲を高める手立て

① 実験の予想を立てさせ好奇心を刺激する【知的好奇心】

未知の気体Xが何であるかを班別に考えさせ予想を黒板に書かせた。生徒は既習内容や生活体験を基に意欲的に考え、実験に向けての意欲を高めた。

② 友達との考えを比較する場を設定し、様々な見方に気付かせる【深い思考】

実験の考察はまず個人で行い、自分の意見をもたせた上で班の中での発表をさせた。そのため生徒は多様な考えに接するとともに、自分の考えと友達のを比較したり関連付けたりすることを通して、自分の考えを深めた。

③ 既習内容を活用し解決する学習を通し、できる喜びを味わわせる【有能感】

授業の最初に、既習内容である気体の性質及び気体の特定のための実験方法の確認を行った。実験結果の考察では、授業の最初に確認した知識や技能を活用し、気体を特定する作業を進めることができた。

④ 称賛することで学ぶ意欲を高める【有能感】

実験中の生徒の発言や器具の取扱い方、実験前後の準備や片付けなど、生徒の動きを教師が具体的に称賛することで、生徒の**有能感**を高めた。



【実験の予想を立てる生徒】

(3) 授業研究会

- ・ワークショップ型授業研究会を行った。
- ・教師が、実験中の生徒の発言や器具の取扱い方、準備や片付けなど、生徒の具体的な動きをその都度称賛した。このことによる生徒の意欲の高まりについて話し合いが行われた。
- ・基礎的・基本的な知識や技能が確実に習得されていれば、それらを活用した学習で「できる」「分かる」感覚を味わうことができることを確認していた。

学習行動がうまくいった時や成功した時の「できる」「分かる」という感覚を味わわせ、さらに学びたいという意欲を向上させるため、既習内容を確認した上でそれを活用させることは効果的です。しかし、時には活用を通して基礎的・基本的知識を習得させる場面を設定することも大切です。このような場面を設定することで、授業の流れが多様化することにより、マンネリ化を防いだり、活用を通して生じた疑問が**知的好奇心**を高めたりします。このような手立ては、学ぶ意欲をはぐくむ上で有効です。

また、考えを深めさせるために自分の考えと友達のを比較する場面を設定することで、互いに高め合おうとする意識が高まり、**学びに向かう集団づくり**につながると考えられます。

ルーブリックを示したワークシート（英語）

◆ 「有能さへの欲求」への働きかけ

ワークシートにルーブリック※（評価基準表）を示し、本時の学習目標を各自にもたせた上で、励ましながら取り組ませることで、「自分にもできそうだ。」というイメージを抱かせている。

右のワークシートは英語の例で、もうすぐ来日する留学生に、日本のことを紹介する単元で使用した。

※ルーブリック

「目標に準拠した評価」のための「基準」つくりの方法論であり、学生が何を学習するのかを示す評価規準と学生が学習到達しているレベルを示す具体的な評価基準をマトリクス形式で示す評価指標である。
（中央教育審議会高等学校教育部会資料より）

P61 L.5 Mini-project 3- () Name ()

日本紹介
●もうすぐ来日する予定の留学生に、日本について説明できるように、準備しよう。

1 昨年の夏某地が留学生のために書いたメモが残っていました。3つの説明を読んで、何が説明しているか書きましょう。
It is a kimono that we wear in summer. We often wear it when we watch fireworks on hot summer nights. Beautiful flowers or butterflies are usually on these kimonos.
What is this?

It is a very cold food that we eat in summer. It comes in a cup. If you don't eat it quickly, it will go away. You can try many kinds, like strawberry, melon or Blue Hawaii.
What is this?

It is a lantern that we often use for festivals. There is a candle or a light bulb inside. The outside is made of paper and bamboo. It can be red or white with black kanji.
What is this?

2 説明するためのメモと準備しよう。
①何についての説明なのか
I'm going to tell you about () .
②それは英語で言うとどんなものか
It's () .
③それは何で作られている
It's usually made of () .
④何をするときに使う？
We use it () .
⑤友達におすそ分けの一言
Why don't you () ?

レベル	S	A	B	C
評定項目	1が答えられる。 2が3～4ができる。	1が答えられる。 2が3～4ができる。	1が答えられる。 2の3～4ができる。	1が答えられる。 2は概観解答を答す ことができる。

S: Super A: 十分満足できる B: 概満足できる C: 努力を要する

【英語のワークシートの例】

単元の目標や学習過程を明示したプリント（国語）

◆ 「有能さへの欲求」への働きかけ

単元の目標や言語活動、学習過程を明示したプリントを作成し、常に今取り組んでいる学習活動の意義を意識しながら授業に参加させている。ゴール地点とそこに行くまでの道筋が明確であるため、目的をもって意欲的に本時の学習に取り組むことができる。

右は、国語のプリントの例で、単元「ロゴマークやポスターを観察・分析して批評文を書こう」や言語活動「コンクールの審査員になって批評文を書こう」を授業の冒頭に示している。また、第1時から第5時までの学習の流れが示され、見通しをもたせている。

国語科学習プリント
「観察・分析して論じよう」① ガイダンス
三年 組 先生

単元の目標
ロゴマークやポスターを観察・分析して批評文を書こう。

言語活動
単元を貫く言語活動
コンクールの審査員になって批評文を書こう！

学習の流れ

時間	内容	学習目標
第1時	単元の目標や言語活動を明示し、単元を貫く言語活動を提示する。	単元の目標や言語活動を理解し、単元を貫く言語活動に参加する。
第2時	「コンクール」の審査員になって批評文を書こう！という課題を設定し、単元の目標や言語活動を再確認する。	課題を設定し、単元の目標や言語活動を再確認する。
第3時	「コンクール」の審査員になって批評文を書こう！という課題を設定し、単元の目標や言語活動を再確認する。	課題を設定し、単元の目標や言語活動を再確認する。
第4時	「コンクール」の審査員になって批評文を書こう！という課題を設定し、単元の目標や言語活動を再確認する。	課題を設定し、単元の目標や言語活動を再確認する。
第5時	「コンクール」の審査員になって批評文を書こう！という課題を設定し、単元の目標や言語活動を再確認する。	課題を設定し、単元の目標や言語活動を再確認する。

【国語のプリントの例】

3 実践のまとめ

C

A

「学習に関するアンケート」の結果から

本校生徒に対して「学習に関するアンケート」を6月（第1回）と11月（第2回）に実施した。7月に行った校内研修では、第1回アンケートを通して把握した学ぶ意欲の構成要素のうち、各学年において「伸ばしたい」「さらに伸ばしたい」構成要素を確認した。この「伸ばしたい」「さらに伸ばしたい」構成要素と「安心して学べる環境」の3点について、各学年の平均値を示したのが次ページの表である。

〔各学年の「伸ばしたい」とされた要素〕

	第1学年	第2学年		第3学年	
	有能感	知的好奇心	挑戦行動	知的好奇心	深い思考
第1回	1.94	2.57	2.34	2.44	2.50
第2回	2.09	2.57	2.18	2.63	2.70

〔各学年の「さらに伸ばしたい」とされた要素〕

	第1学年		第2学年		第3学年	
	有能さへの欲求	向社会的欲求	有能さへの欲求	向社会的欲求	有能さへの欲求	向社会的欲求
第1回	3.31	3.42	3.40	3.50	3.31	3.35
第2回	3.41	3.43	3.55	3.62	3.38	3.58

〔安心して学べる環境〕

	第1学年	第2学年	第3学年
第1回	2.80	2.59	2.69
第2回	2.89	2.78	2.76



〔友達のプレーに拍手を送る〕

- ・各学年の「伸ばしたい」とされた構成要素において、向上の傾向が見られることを確認できた。学年ごとに手立てを考え、授業実践を行ったことが数値の上昇につながった要因の一つと考えられる。
- ・研究授業や日頃の授業実践では、各学年の「伸ばしたい」として課題とされた構成要素以外に対しても適宜働きかけが行われたことが、多くの構成要素における向上につながったと考えられる。特に、「さらに伸ばしたい」とされた構成要素である**有能さへの欲求**と**向社会的欲求**は全ての学年において向上が見られた。
- ・学校全体で「5かけの教育」を推進し、生徒一人一人の実態把握と個に応じた適切な指導を行ったり、生徒間に認め合いの雰囲気を醸成したりする取組が、**安心して学べる環境**づくりにおいて、有効な手立てとなっている。

「ふだん思っていることに関するアンケート」の結果から

本校生徒に対して、「ふだん思っていることに関するアンケート」を6月（第1回）と11月（第2回）に実施した結果の一部を次に示す。

クラスでの自己有用感の結果【校内全体】（第1回:6月、第2回:11月実施）

	自己有用感	関係性	存在感	貢献	承認
第1回	3.22	3.70	3.06	3.28	3.31
第2回	3.30	3.87	3.19	3.26	3.46

- ・2回実施した自己有用感の調査で、クラスでの自己有用感の結果を比較すると、多くの項目で伸びが見られた。

教師の手応え

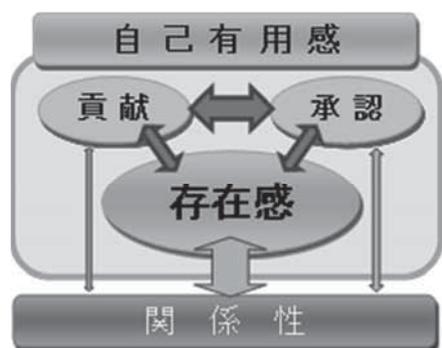
- ・各学年とも高めようとする構成要素は違っても、そのベースにあるものは、やはり「安心して学べる環境」だと感じました。
- ・基礎的・基本的な知識・技能がしっかりと習得されていれば、授業の中で、「できる」という感覚に出会ったり安心して学べたりすることが確認できました。
- ・小グループの中で自分の考えを聞いてもらえる、または教えてあげられるという経験は、自己有用感を高め学ぶ意欲を刺激する上で効果的だと感じました。
- ・その教科の特性に合う学習訓練をしっかりと行い、その上で安心して学び、協同して学び、認め合いながら学ぶ姿勢を築いていきたいです。
- ・小さなつぶやきを取り上げることが、生徒の自信を高めるとともに、授業の方向性を発展させることに改めて気付きました。
- ・日頃あまり表に出ない生徒でも、ある授業の中では存在感をアピールできるのは、その生徒を認める雰囲気が醸成されているからであり、その基礎となるのは、日常生活における集団が安定することではないだろうか。

実践から学べること

- 学習に関するアンケートの結果を分析し、各学年で学ぶ意欲を高めるための手立てを考え、目標を共有することは、学ぶ意欲を高める上で有効な取組です。
- 初めてワークショップ型授業研究会を実施する際は、最初は少人数で行い、その参加者を次回以降の研究会では各班の中心として配置することで、円滑に研究会を進めることができます。
- 「5かけの教育」等により一人一人の実態を把握し個に応じて適切な指導を行うことは、生徒にとって**安心して学べる環境**を醸成し、それを基盤として学ぶ意欲を向上させるとともに、生徒の集団への**帰属意識**を高めることができます。
- 授業の冒頭で、本時や単元の見通しをもたせたり、結果を予想させたりすることで、自分にもできるかもしれないというイメージを抱かせ、**有能さへの欲求**へ効果的に働きかけたり、**知的好奇心**を高めたりすることができます。

【参考】 「学ぶ意欲」の各要素と「自己有用感」との相関関係

当センターでは、平成24年度に自己有用感に関する調査研究を行いました。そこで、自己有用感を「他者や集団との関係の中で、自分の存在を価値あるものとして受け止める感覚」と定義しました。また、調査研究を通して、自己有用感は、主に「存在感」「承認」「貢献」の三つの要素から構成されることが分かりました。これらの要素が互いに関連し合うことで、自己有用感が高められていきます。次の図は、これらの要素同士、そして要素と「関係性」との関連の強さを、矢印の大きさを模式的に示したものです。



- ・ **存在感**：「他者や集団の中で、自分は価値のある存在であるという実感」
- ・ **貢献**：「他者や集団に対して、自分が役に立つ行動をしているという状況」
- ・ **承認**：「他者や集団から、自分の行動や存在が認められているという状況」

◇「**関係性**」は、安心感や被信頼感などから構成されており、自己有用感を獲得するための前提であったり、土台となったりするものと考えられます。

自己有用感を構成する三つの要素と「関係性」

協力校の児童生徒を対象とし、「学ぶ意欲」と「自己有用感」の質問紙調査結果の分析を行いました。学ぶ意欲の要素と自己有用感の要素の相互相関に関する表を、次に示します。表1は小学生、表2は中学生が調査対象です。

表1 学ぶ意欲の要素と自己有用感の要素の相互相関

(調査協力小学校3年～6年の児童 203名)

学ぶ意欲 \ 自己有用感		先生との関係における自己有用感			
		存在感	貢献	承認	関係性
認知・感情	有能感	.558	.517	.298	.249

学ぶ意欲 \ 自己有用感		クラスでの自己有用感			
		存在感	貢献	承認	関係性
学習行動	協同学習	.374	.479	.508	.461

※ 数値はピアソンの相関係数 (-1.0～1.0) による 全て0.1%水準で有意

協力小学校では、「有能感」と「先生との関係における自己有用感（存在感）」の間に、また、「有能感」と「先生との関係における自己有用感（貢献）」の間に強い有意な相関が見られました。さらに、「協同学習」と「クラスでの自己有用感（承認）」の間にも強い有意な相関が見られました。

これらのことから、例えば、授業中の発言に対して教師が価値付けをすることにより、有能感が高まることが考えられます。

表2 学ぶ意欲の要素と自己有用感の要素の相互相関

(調査協力中学校1年～3年の生徒 170名)

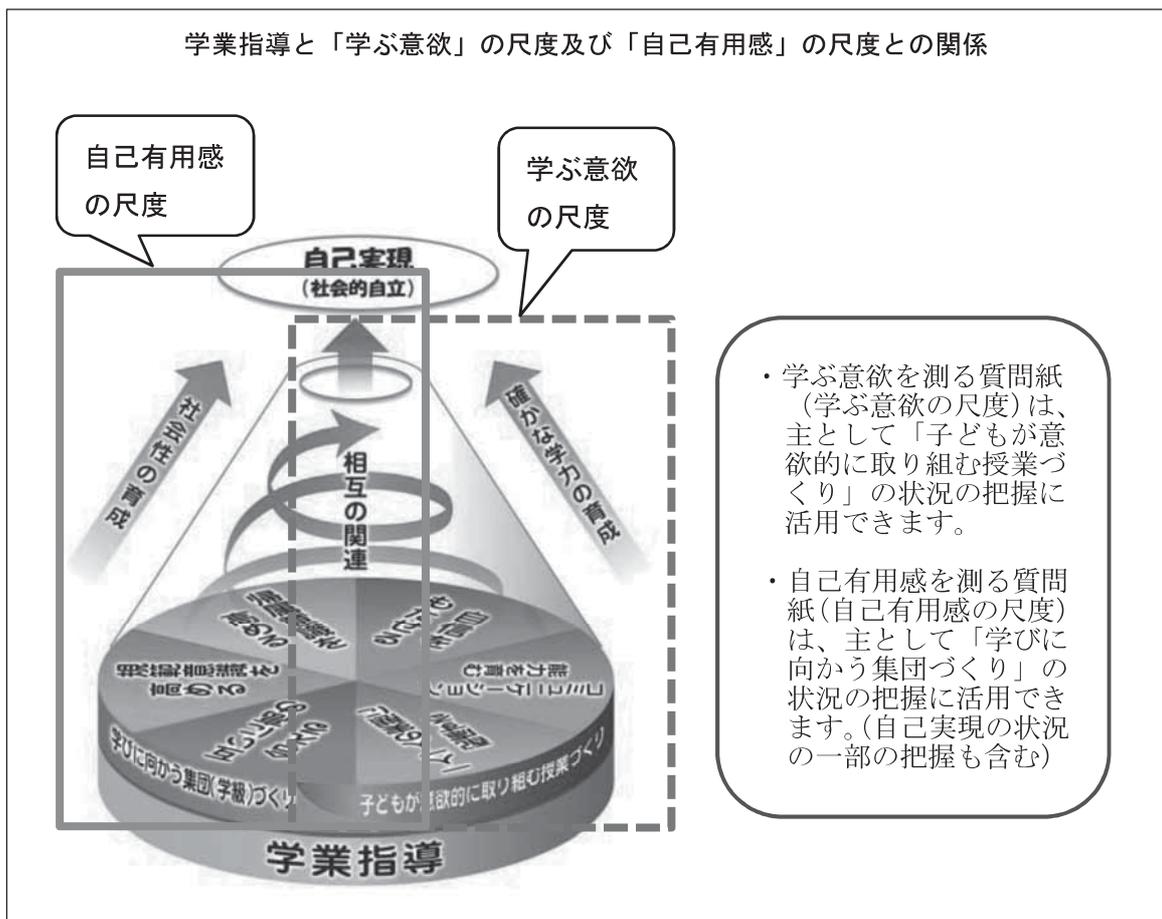
学ぶ意欲		自己有用感	クラスでの自己有用感			
			存在感	貢献	承認	関係性
認知・感情	有能感		.487	.374	.382	.355

学ぶ意欲		自己有用感	クラスでの自己有用感			
			存在感	貢献	承認	関係性
学習行動	協同学習		.393	.389	.492	.332

※ 数値はピアソンの相関係数 (-1.0～1.0) による 全て0.1%水準で有意

協力中学校では、「有能感」と「クラスでの自己有用感（存在感）」の間に強い有意な相関が見られました。また、「協同学習」と「クラスでの自己有用感（承認）」の間に強い有意な相関が見られました。

これらのことから、例えば、協同学習の際に困っている友達に教えることにより、クラスの中で認められるようになることが考えられます。





ここに注目！⑤

学び合いについて

授業の在り方の一つとして、一斉指導で基礎的・基本的な知識・技能をしっかりと教えるという、いわゆる教師主導の指導があります。一方では、学び合いや教え合いを通して、自他の考えを比較しながら様々な見方・考え方に気付くというような授業も行われています。

子どもが他者に教えるという行為は、「役に立ちたい」という**向社会的欲求**が表出したものです。教えることで教えた相手が分からなかったことを理解できたり、新たな考えに気付いたりしたことを実感すると、「役に立ってよかった。また自分で学んで教えよう。」と、さらに学ぶ意欲が高まるものと考えられます。また、教わる方も、自分が気付かなかった違う考えと自分の考えとを比べ検討・吟味することで、より深く考えることができます。つまり、**深い思考**につながると言えます。

この学び合い、教え合いを行う上での注意点を次に挙げます。

① 教師の意図に応じた学び合いの設定

やみくもに学び合いの場面を設けると、「活動あって学びなし」の状況に陥りがちです。そこで、単元の中で、本時のねらいがどのようなものであるかによって、「学び合い」の中身を変えていく必要があります。

例えば、「知識・理解」をねらいとするならば、「学び合い」のまとめで、教師が子どもたちの言葉を使いながら、身に付けさせるべき知識について説明することが考えられます。また、「関心・意欲・態度」をねらいとするならば、「学び合い」から生まれた子どもたちの考えを存分に出させ、教師があえてまとめることをしないとといった授業展開も考えられます。

② 活動の前の適切な指示

特に、話し合いを伴う際には、漠然と開始するのではなく、どういった目的の話し合いなのかを子どもたちが十分理解して活動を行うことが必要です。そこで、話し合いの前に、例えば次のような指示をします。

- ・考えを一つにまとめましょう。
- ・たくさんの考えを出し合いましょう。
- ・たくさん出し合ったら、同じような考えでいくつかにまとめましょう。